

ぽえ犬通信

2026.3.15
Vol.45 FREE + ♥きもち

COCOROOM ココルーム

特定非営利活動法人 こえとことばとこころの部屋



絵：岡本風愉

火守り

しゃべりたくないんです。
私は言う。
面と向かって自己紹介とか、なんか少し恥ずかしくな
いっすか？
自分が何者であるわけでもないのに。
ごめんなさい。
だから、謝る。
変な虫がくつついて、あの場に立つことに対して。
へこへこと謝る。
親父が癌になって、。
大義を持ち出している。
僕にとって、昔からあるものだったんです。
ただ、事実を連ねる。
家業みたいなもんだと思っていらっしゃるんです。
そうとしか言えない。

偉いね。
頑張ってるね。
ようやくやる。
腹くくったんやったら、協力はしてあげる。

ただ、あれが、あの光景が続く事を思っている。
好きだから、では、もうないんだと思う。
あれは私の義務で、大好きなもので、

あれは、私の生活だ。

手伝える事。それが、多分私と小山田さんの繋がりだった。
もっとあったやろ。

何が分かる。
全力でついていくために私はそこにいる。

本人は全く思っていない。

そうであってほしい。

私がしたいことだ。

火を焚きたい。

死に物狂いでそれについて考え続けている。

今こうするべきなんだと

それだけは分かる。

馬鹿だから、分からないから、必死に走り続けたい。
後悔を残さないために。

だから、あなたが死んだら。

怖い。

小山田トオキ

ココルームスタッフ。

父、小山田徹が焚火の活動をしている。父が病気に掛かってからは活動を手伝う
互助組織「ステージ4」として「チビ火」のワークショップを手伝っている。

あるひ

ある日、ある火をもって歩きに出て行った。火がゆらゆら揺れながら村をぶらぶらしている間に、火は道に落ち、石畳に蒔かれた種火はそのまま枯れ消えた。

ある日、ある火をもって歩きに出て行った。火がゆらゆら揺れながら路地裏をぶらぶらしている間に、火は道草に落ち、草に蒔かれた種火はついて、しばらくめらめらと燃え続いて、草が少なくて周りに何もなくてすぐ尽きて消えた。

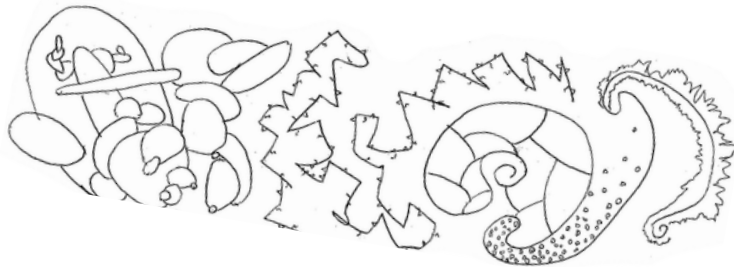
ある日、ある火をもって歩きに出て行った。火がゆらゆら揺れながら町をぶらぶらしている間に、火は廃材に落ち、捨てられた木材に蒔かれた種火は燃え上がって周りを焦がした。その内火は通りがかりのひとに水がかけられて静まり返った。

ある夏の日、ある火をもって二人で歩きに出て行った。火がゆらゆら揺れながら山に登った。日は暮れてもまだ暑い。今年の降水量はすくない。風で揺らいでいるがさがさする木の葉と水分を求めている草木。火をポツンと朽木に落として口火を切った。種火はへらへらと燃え盛る。あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍の実を結ぶ。見渡す限り火花が咲いて散っていく。ほんのちびっことばで辛辣な火の手が炎の本書く。煙たくて息苦しい。やがて灼熱の火はだんだん鎮まってきて、燻っている灰とじんじんする焼印だけを残す。

ある日、ある非を担って歩きに出て行った。非がずきんずきんと痛みながら山に登った。焼き尽くした木々と荒廃をじっくり見て原点に帰った。跪いて冷めた灰を手探って土に穴を掘った。非を埋めて、一拍置いて、立ち去った。ところどころに灰から萌えている芽に見られながら山を下った。

デイビッド

いままでもこれからもデイビッドです。Soli Deo gloria



火あたま

他の人の原稿があがってくる。あるスタッフから受け取った「ちび火」が、こんなことを考えさせてくれた。

この日は踊りのWSに向かっていた。

似てる。その感覚は鮮明だ。火の粉が、どこかへひらりと消えていく。燃え移って大きくなっていくあの感じは、あたまの中に似ている気がした。

ココルームの庭で火を囲む。火のはぜる音だけが響く静かな夜。沈黙。ぽつりと誰かの言葉が落ちて、からだ意識を取り戻した。ひとつの言葉がこだまし始める。聞き覚えのある話、聞き馴染みのある声。「そういえば」今度は耳から聞こえる声。気がつけば、目の前の話は次に進んでいる。からだがあたまに呑み込まれそうな、これはなんなんだ。

からだの感覚を研ぎ澄ました数時間。輪になり振り返りがはじまる。自分の番がくるのを待っていた。

感じたことは？わたしの伝えたいことは？言葉を探り、つなぎ合わせようとする。輪郭がなく形が捉えられない。曖昧なまま宙に浮いている。それは言葉として取り出せるのか。向かいの人から時計回りに語りだす。「そうだよな」共感から溢れ出るものが止まらない。言葉ではない。音が喋っているような。あー、まずい。用意したものは何だっけ。あたまの中で整えた言葉は、すぐに崩れてしまう。忘れないように、でも広がりを止めないように小さく小さく。はあ、もう声を出したくてたまらない。

はっ。ちび火。数時間前のあたまにあった、あれだ。生まれて、飛んで、大きくなって小さくなって、どこかへいなくなって。制御できない。

ごくり。呼吸を整えて。

ほんの少しだけ口から出ていった。

それでも時を跨いでも、あたまにはこうやって残っている。

からだにも残っている。

きょうか

顔周りの特徴。への字の眉毛。左目の方が小さい。
髪は少し癖があり。量もある。三つ編みがほどけやすい。

ぽんとぽこん

だれかに読まれて困るノートを
いつまでもとっとくのはやめて
いまのうちに捨てようと思ったのに捨てられなくて
リングで閉じられたノートをびりびりにちぎって
フライパンの上にのせた
ライターで火つけると何年かかけて書いた文字が
黒く縮んで読めなくなってゆく
せまいキッチンフライパンの上
ときどき高く燃えあがろうとする
火こわくてずっと目離さないでいた
フライパンの不自然な焦げあとが目には焼きついた東京から
大阪に引っ越してきて4年経った
ココルームの庭で火見ること多かった
包装紙や紙箱を燃やしていると隣にひとり増えて
ちょっと火見といってもらう
だから途中でトイレ行っても大丈夫だった
ぽうっと小さくなる火見つめてる
意地悪なきもちが湧いて気がそぞろになっている
ひとりが薪を追加した
また火強くなってすこし安心した
ひとり隣にまたひとり集まって話がはじまる
聞こうとすることばが宙に浮いてばらばらする
それをつかんで並べなおして
そのうち話は移りかわって
燃やすことは人に任せてわたしはもどった
さむい！
その人がいらだった声でいうので慌てて暖房をつけた
しばらくすると
あつい！
荒々しく呼ばれて暖房を消しにいく

タバコが吸いたい！
庭に案内しろ！
ゆっくり歩け！
ちがうもっと早く！
まってよ！早い！

行ったり来たりする理不尽にどうしていいかわからない
とにかく庭まで案内してその場を離れようとする

行かんといて！さみしいんや！

急に背中の方から叫ばれた
思わず笑ってしまう
一瞬しまったと思った
その人はすでにタバコに火つけて吸っていた
わたしは手持ち無沙汰に突っ立って
その人がタバコ吸い終わるまで待っていた

さみしかったのか
なんでかちょっとわたしは背中押されてしまって
叫ばれたさみしいという声としんしんと落ちてゆく
ことばがわたしの池みたいなのところに
ぽんと落ちて揺れている
だからわたしもまた
ぽこん
くすぶったものを置いてけた
なんだかその時の火も忘れられなかった

岡本 風愉

1日が長すぎて走り出すように嬉しく嘘がばれるまでの時間に
途方に暮れていたころはどうにもすぎいつのまにか靴のサイズは変わら
なくなっても工夫する生活たとえば早起きでんぐり返し

わたしの小情歌

もう恋のうたなんて
知らないつもりでいたけれど
音楽がわたしを連れていこうとする
心がゆれたり おどったり
急に涙があふれたり
止められない気持ちは恋に似ている

もう愛のうたなんて
うたうつもりもないけれど
それでも大切に想うひとはいて
それがだんだん増えてゆく
急にある日 出会ったり
いろんな形の愛にとまどう

生きているって しょうがない
めんどくさいけど ありがたい

飴のように儂いけど 確かに甘く
うたのように頼りないけど
確かにともる 小さな灯
その輻射が わたしを温める

生きているって しょうがない
めんどくさくって ありがたい

庄司しょうゆ
のこぎり弾いたり うたったり♪
蘇打緑リスペクト 謝謝♥

デカ火

「チビ火」と言うけど、小さくていいのだろうか。私の家には薪ストーブがあったけれど、小さい火はあまりあたたかくない。だからといってストーブに近づくと、通り道をふさいでしまって、家族に怒られる。大きい火ならよかったのに。大きい火なら、みんながあたたまるし、近づいて怒られることもない。近づかなければ、服が溶けることもない。

でも、そうやって、ひととひとが離れていってしまうのかもしれない。60年くらい前の、大勢の人が肩を寄せ合って歌を歌う映像のコメントに、「今はみんな近づきたがらないから、こんな風景は見られない」と書かれていた。そんな。私もこんな風景を見てみたいのに。できれば自分も、その輪の中にいたいのに。

だけど、私も近づきたくないのかもしれない。人に近づくの、近づかれるの、怖い。知っている人でも、肩を叩かれるだけで、焦る。なににかはわからないけど。

この前、ストーブの近くに椅子を置いて本を読んでいたら、三番目の妹がやってきて、「そこは私の場所」と私をどこかそうとした。私が動かずにいたら、中2の一番上の妹が「そうだそうだ」と言いながら私の膝の上に座ってきた。人肌は火よりもずっとあたたかくて、このくらい近くてもいいのかもしれないな、と思った。それが誰でもいいのかは、まだわからないけど。小さい火はあまりあたたかくないけど。ちょっとずつ、近づけるのかもしれないと思った。

下島夏（インターン）

将来は大きな薪ストーブのある小さな家に住みたい。

小さな火とややこしさの衣

家それぞれにしきたりや慣習があるのだろうが、夫の実家に驚かされることはいろいろあった。

なかでも、びっくりしたのは食卓の様子である。夫の父は食べものに人一倍の執着があり、食材を自分で調達しては調理もこなす。冷蔵庫には日本各地から取り寄せた海山の幸がぎっしりと詰まっている。そして、食卓には肉も魚も一度に出て、脂身の多い牛肉を焼いたものとマグロやブリやイカの刺身、その横にはナマコ、タコを炊いたものもある。毎日お正月の様相である。

その義父が年末に末期の肺がんとなり、入院した。日に日に衰弱していく様子が残酷で、気持ちが塞がる思いであった。しかし、もう片方の肺で生きること慣れてきたようで、痩せて衰弱しているものの、ここ数週間は元気である。起き上がるだけで酸素濃度が一気に下がっていたのが、今では部屋の外のトイレに行けるようになっていく。そうすると、食への執着がニョキニョキと出てくる。

淡路島にある病院に、夫と私は毎週末通っている。数年前から認知症の義母は、義父が入院したのと同時に要介護3になって介護施設で居住できることになり、なんとかこの状態を保っている。義母を迎えに行き、一緒に義父の病室へお見舞いに行く。行く前には注文が入っている。肉を焼いて持ってこい、寿司屋でマグロとイカと貝柱を買ってきてくれ、するめいかを持ってきてくれ、じゃこ天がええなあ、安もん買ったらあかんぞ、という具合だ。夫は好きにさせてやりたいようだ。

お寿司を、院内の共用スペースでテーブルを囲んで食べたがる。そして、認知症の義母の世話をしていた義父は、世話を焼きたがって、お寿司を義母に食べさせようとする。うまく口に運べないのがもどかしいのか、叱責しながら口に無理やり入れて食べさせる。その様子を見てみると、胸が押しつぶされそうになる。ああ、こうやって認知症は進んできたんだと、目を向けずに気づいてこなかった愚鈍さを悔いる。

翌週、義父は食欲もなく、元気がなかった。すると反対に、義母は快適そうであった。小さな火を囲むように、ただそこにいただけという、そんなシンプルな時間を想像していた。それはしかし、もっと弱っていることを期待するかのようだ。そんな近い未来を恐れている裏側で。そして、弱ってはじめて献身的になれる自分に複雑なものも感じている。

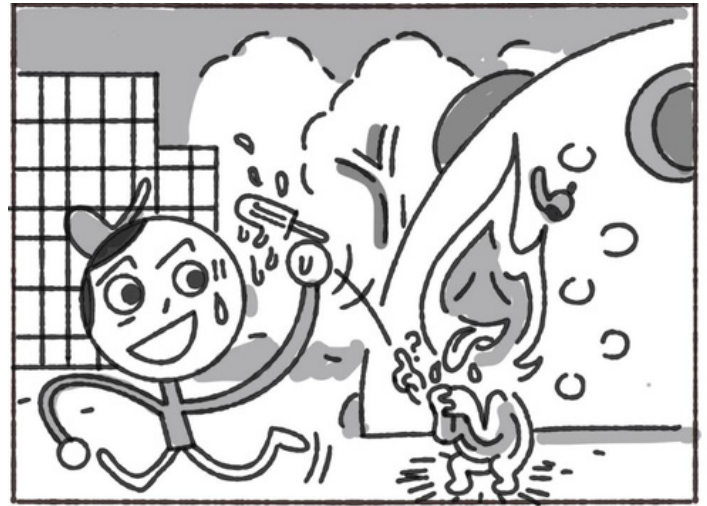
ややこしさの衣を剥いで小さな炎を見ることができていればと。この後におよんで、酸いも甘いも苦いも複雑に思いが去来し、気づくことの多さに、驚かされている。

江藤まちこ

かまぼ〜 / 義父母の状況に加え、実父も来月手術で付き添いと、ここんとこぐちゃぐちゃな日々。



ロドリゴ



ロドリゴ

赤色のヒーロー

幼い時の記憶。テレビっ子だった私は、日曜の朝は必ず「スーパー戦隊シリーズ」を見ていた。正義のヒーローが巨悪な敵を倒すという、あまりに単純明快な、勧善懲悪のストーリー。だけど、ことばを覚えはじめた私が、話の内容を理解するにはちょうどよかった。

いったいいつ頃まで見ていたのだろうか。10歳ぐらいまでは、ぼーっと見ていた気もする。ただ、不思議なことに、赤色のヒーローに憧れを抱くことは一度もなかった。いつもみんなの中心にいて、勝ち気で、熱い想いをもった主人公。色は赤。なぜそう相場が決まっているのか分からないけれど、戦隊ヒーローを代表するレッド。そんな彼のことを、私は好きにはなれなかった。むしろ、その脇にいる緑。影が薄く、周りに優しいが、力が強いわけではないグリーン。

そんな登場人物に自分を重ねていた。

ちび火ではなく、ちび緑。

戦隊ヒーローたちの色とジェンダー役割には多分関係がある。「多分」と言ったのは、最近はどうやら意図的に、リーダーの色を変えたり、ジェンダーレスなヒロイン/ヒーローを登場させたりしながら、ステレオタイプなキャラクター像を超えようとしているらしい。

ヒーローといえば赤で、リーダーシップを発揮して、いつも中心にいる、というのは、もはや大人たちの勝手なイメージになりつつある。

序に言うと、この文章を書きながら、戦隊ヒーローシリーズが今年2月に最終回を迎えたことを知った。時代に取り残されそうになっているのは、むしろ私だった。色とキャラクターを一對一で重ねられるほど、世界はそんなに単純明快ではない。赤、青、緑、黄、ピンク。明るい人、暗い人。堅物な人、能天気な人。良い人、悪い人。そう分けてしまいそうになるけれど、実際にはグラデーションがあったり、混ざり合ったりしている。

そのことに気づく人が少しでも増えてくれればと、最近流れた選挙広告を見て思う。正義と悪。ヒーローと敵。その二分された状況に疑問を持ってほしい。緑が好きだった私はそんなことを感じている。

きょーじゅ（社会教育学者）

おせち料理の黒豆を作ってみた。時間はかかったけど、美味しかった。おばあさんにつくってもらったおせちの味を探している。

歩行、口腔、環状線

ニッキ飴を舐めながら、大阪環状線、徒歩一周を目指して歩いていた。

まだ薄暗い朝6時半に、新今宮駅を出発し、西方向へ外回りで進んだ。線路沿いの直線の道をあえて歩いていく。

淡々とした歩行のリズムが足全体に響く。何度も何度も電車に追い越され、歩は遅々として進まない。電車の車輪がレールにぶつかるスリとした音が右耳に響いて、やがて遠のいていく。歩行のリズムと車両のリズムは交わらないという感覚が途方に残り、足の裏に粘つく。道はまっすぐ続いていく。

7kmくらい歩き、西九条駅を越えるころには、太陽の光は幾分かの弧を描いており、空にさんさんと染みわたっていた。足が、確かに徐々にすり減っていくのがわかる。足裏が痛み、アキレス腱やふくらはぎに、わずかな炎症がくすぶりはじめる。それでも線上を動く点は、のろのろ、じりじりと歩を散らしていく。足は確かに弧を描いていることを知る。

ニッキ飴をジャンパーのポケットにたくさん詰め込み、つど舐めながら歩いていた。エネルギー補給のために持ってきたが、歩いていくうちに、足だけに意識が向かうのを紛らわすために舐めていた。

口のなかを動く琥珀色の球体は、舌の上を転がされたり、頬の内側と歯のあいだに納められたり、軽く噛まれたりしながら、つど位置を変える。粘膜と唾液によって飴はゆっくりとすり減らされ、じくじくと溶けていく。その緩慢な動きと、ほのかな辛味が、唇から喉にかけて浸透していく。

歩行は、直線をゆっくりなぞっていく。高架化された線路のそばにある道は、どこも似ている。飴が歯に当たるカチカチという音が口内に響き、足もリズムを刻む。環状線に数秒で追い越されても、飴玉は口のなかに居続ける。口腔のリズムと環状線のリズムはすれ違うことはないという質感だけが口のなかにけむり、こもる。足はかたいアスファルトと摩擦を続けていく。

16時ごろ、京橋駅。日没が近づいていく。飴玉が溶けて消えてなくなると、足の痛みが意識の前方にせり出してくる。ポケットから取り出してまた一つ口に入れる。冷たかった飴玉が、徐々に熱を帯び続けていくのを感じながら、また淡々と足先を交互に差し出していく。

18時すぎ、鶴橋駅を越える頃には、空は暗くなっていた。ポケットのニッキ飴はすでになくなっていて、前途に投げられる焦りを抑えつつ、身体の内側に歩の音を引き寄せる。煌々と無機質に光る車両は、目の前の空気を照らし、右頬を外側から無愛想になでていく。

19時前に天王寺駅を通り過ぎる。歩行という身体の時間と、環状線という都市の時間はやはり噛み合わない。新今宮駅まであと少し。前方に、朝のかつての背と尾とが見えてきつつある。

19時半に新今宮駅に到着。自らの尾を噛むウロボロスの蛇のように、歩の終わりは、尾の先端に噛みつく。その事実だけが、身体の内かに焦げついた。それを痛快に、足で噛み締めた。

中村佳史（哲学）

ココルーム〈スタッフ〉になってもうすぐ一年経つ。やっと一周だ。

去年舐めていた飴玉の味をもう一度思い出し、また。

人体発火説

朝、目が覚める。頭が起きず、体をよじる。または、パチッと目が覚める。頭が冴えて、勢い良く体を起こす。この操作をしているのは誰だろう？もちろん、僕が行為の主体だ。だが、なんとなくよくわからない、、、

ヒトはなにか動作をするとき、神経を電気になった信号が通っていくらしい。その速さは秒速100M。小さな小さな火花のスパークが、連続して一瞬で燃え移っていくように、体の中を駆け巡るイメージだ。指一本動かすにも数万本の神経それぞれに小さなスパークが起きている。指先で何かを触れた刺激が頭に届いて感知するのも同じスパークが。それこそ体の中には月までの距離の2,6倍の100万kmの神経が入っているとのことで、全身がスパークしまくっているわけだ。脳の細胞もそう。僕の意識も意志も、その結果起きてしまった現象なのかもしれない。

そう考えると、普段は目に見えないけど人の体がスパークによって煌めいているようなイメージが浮かんでくる。小さな小さな火の集合体が僕であり、あなた。命の火が揺れているなんていうけれど、小さな明滅がつながって広がりながら不断に起きているっていう感じか。なんか、スーパー玉出みたいやん。

催眠術師は火を使う。ライターの火を顔の前に持ってきてゆっくりと揺らす。放火常習犯の中には火が心を落ち着けてくれるからと放火依存症の人がいるらしい。庭で焚火を見ていると、僕のDNAに何かがざわざわと動くのを感じる。これらは全部きつと、僕らの中の火が反応しているからなんじゃなからうか。火は燃料を燃やして、隣に燃え広がっていく。

釜ヶ崎、ココルームに来て、5年。むきだしの火がずっといたりきたりしていた。行き帰りで何度も救急車を呼び、死者の前で生者の隣で歌を歌い、お客さんの杖を間違えて売り、92歳男性のピアノに喝采し、誰かのうんこも掃除して、色んなおしゃべりをした。誰からも忘れられてしまうような小さな火は、数え切れないし、思い出しきれない。

花火ってきれいだ。そしてきれいだと思う瞬間、同時に体の中で無数の花火の花が咲いている。人との出会いも発された言葉や音も発火の結果。火が燃え広がって風を起す。誰かの火に反応して、また小さくきらめく。寝ているときでさえ絶えず発火してる体。燃料がなくなるまで。小さくても花火がどーん。

げん（ミュージシャン）

ココルームにきて5年が経ちました。そして、ココルームスタッフとしてここに文章を置けるのは今回が最後です。何よりもまずは出会ってくれたみなさまありがとうございました。僕とココルームとの関係性は第2章へ。これからもよろしくね。僕の体の中の脈動はこれからも、終わるまで続く。

ちび火

待たせてすまんだの。お主がワシに聞きたいことがあると言うのは、すまんすまん。そうおこるな。航時機が時空のゆがみでおくれたんじゃ。ゆるせ、それではなしとは、どうしたんじゃ、「ハトが豆鉄砲くろうたような目」をしおって。源内先生の弟子からなにも聞いておらんのか。うーん、そこから話すとワシも早う帰ってお八重と五鉄へそのシャモ鍋をな、まあ手短に話すのでよく聞くんじゃぞ。お主が知りたい「チビ火」なるものが、そのお主の思いが時空をこえて源内先生のエレキテルに反応して船時機がさどうしてワシがやってきたんじゃ。

「チビ火」とは何ぞや、それは人それぞれがともす小さな心の灯、簡単に消えてしまいそうじゃが「小さな灯」が集まって消えない消せない灯になるんじゃ。その灯を大切に世を照らすことになるそう。

ちいさくされた者、隅っこに追いやられた者の灯ほど強くたくましいでな。これはバテレンさんの受け売りじゃがの。他にはの、とある寺に「千年の灯」いうのがあるそう「小さな灯」じゃがずっと消されず守り続けておるそう。ともしつづける事が大切なんじゃそう。まあこれも坊さんから聞いた話じゃがな。

うん、ワシか。ワシは「チビ火」と聞けばそりゃ「遠州見附の「チビ火」の「伊佐治」、こいつあひとりばらきの盗人まあ1匹狼ってやつよ。小さくされた者や弱いものをいじめたぶり都合のいいように話をすり替えだます。代官や役人、それに大店。今風に言えば政治家や大企業のようなそんなヤカラから金品をかすめその金品を小さくされた者、貧しい者、病に苦しんでいる者、その家族をそしてウラオモテなくまじめにくらしている者らに分け与え、残った金品で各地に報謝宿なるものを作って家のないものやみなし児たちをすまわせ、田畑を作りハタおり読み書きを教え暮らしが成り立つようにさせておるんじゃ。まあこれも長官からの受け売りじゃがの。うんそんな他人の話よりワシの話をせよってか、お主そんなにワシの話が聞きたいのか!!

子供のころ火遊びをするとしょんべんちびるゆうて親からしかられたもんじゃが、大人になってからの火遊びはやけどではすまんぞ。情念の炎でやきつくされる。ついでにじゃが「やけ棒杭に火がつく。こいつあいけやせん、世間様が放っておかん、油をそいでな、他人の不幸はいうてよろこんでな、まあつらかったという体験をワシはした。

さてシャモ鍋喰いに帰るとするか。「ワシか、ワシはな、問われて名のるもおこがましいが」、はよ帰ろ。お主くれぐれも用心するんじゃぞ。

続く。

春山桜王（時空渡り鳥）



(絵) 春山桜王

-Sin título-

Cremados y elevados,
vemos el cerco como relevante,
sin empuje de la naturaleza,
los sistemas nos oprimen informacion,
apagando ese fuego interior,
la desesperada tormenta de locura,
espiralizando meteoritos de pasión,
representa una bomba para el cuerpo,
que ni todos los mares del mundo,
podrían ahogar.

ロドリゴ（フリアコ）
スペインのイラストレーター。暇なときは日本語を勉強しています。

味付けは、しょうゆかポン酢

長いようで短い期間だったけど、何回薪をくべても語り足りないくらいたくさんの貴重な経験をさせてもらったと思う。

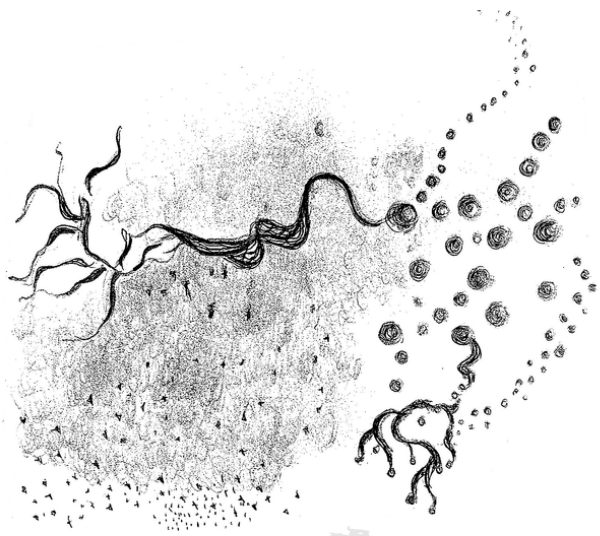
だる絡みの意味をみんなで考えたり、家出した女の子に飴をあげたら喜んでくれたり、服の海の中からその人に似合う服を選べたり、とんでもないのと友達になってしまったり、いろんな人と協力して手作り看板を作ったり、また会いましたね、と会う度に言われる不思議な縁のある人がいたり、お皿を洗いながら話を聞いて、そのままでもいいよと認められたり、音読をして、棚を白く塗りながらお喋りしたり。

少し疲れた日に楽しそうなマツケンサンバの話で元気が出たり、休んでていいのにりんごを剥いてくれている人がいたり、おじさんが奢ってくれたどて煮を二人で食べたり、一緒に笹の葉を切ったら台湾にとっても詳しくなれたり、お互い様だね、って言ってもらえたり、みかんを渡したらガトーレーズンになって返ってきたり、ささやかなクリスマスプレゼントをくれた彼女と歌を歌って冬を越したり、タオルを干すのを手伝ってもらったり、ありがとう、またね、と言い合って終わる一日が何度もあったり。

私はまだ大きなものに囚われてもいて、何をしても間違っているような気がするこの頃だけど、ただ、言葉にならない、小さくて温かい火のような何かだけは、無視して生きることが出来ない。そして、そういう何かが、この場所には確かにあったのだ。

…って、何だかどこにでもありそうなデジャブな書き方をしてしまったような気がするけど、まあいいか。私が読んで欲しいのは、どこにでも居るはずのあなただし。ちなみに、デジャブの反対、見慣れた場所や言葉が突然未知のものに感じられる現象はジャメヴって言うんだって。へ〜！おもしろ！と思って書いてみたよ。深い意味？そんなのないない！まだまだ知らないことだらけだな〜、なんてね。

なっちゃん（インターン）
やっと人生始まったかも？
いつか北海道に行ってみたい。



「チビ火」

「チビ火」って何？ググって見る（笑）・・・小さな火を囲んだりしてダイアログか？とか思っていたら、「板金工場が作った頑丈でコンパクトな焚き火グリル[ちび火君]です」ってグーグルAI先生が、簡易燐製機のような写真とともに解答してきた（笑）・・・とか原稿に悩んでいるインターンの私の目の前では、今、日替わりヤングばいせん師匠の1人「とうき君」がギター片手に曲をつくっている。その手前にはもう1人の師匠「げんちゃん」が宿泊代の値付けで頭を抱えている（笑）左手にはさらにもう1人の師匠「デイビット」がアップライトピアノをボロンボロと・・・

こんな感じがインターン1週間目2月9日[cocoroom]の1日の終わりの風景。

これではアカン（原稿進まん・汗）と思い、もう一度ググてみる(汗)すると「[ちっちゃい火]を囲む・異なる立場の人が居合わせ、火を囲んで同じ時間を共有する。そのための場をしつらえ、暖をとり、お茶や食べ物を味わいながらゆっくりと過ごす時間」とゆうのが出てきた。おおっ！これやがなとゆうのが出てきた。こっちのイメージがピッタリくる。先月、インターンになる前に、釜芸で参加した「焚き火deオープンマイク」と一緒やがなっ！腑に落ちた。

ここで少し戻って「チビ火」って何？と思った時に意味や事象をAI先生にググる前に直感的に頭に浮かんだイメージが有る。それは、初めは何も無いところからチロチロと小さな炎が巻き起こってきて、じわっと滲み出すように全く新しい感じの何かが広がっていく様だ。昨年、秋頃、ぼちぼち定年退職後の仕事を探しにハローワークにでも行こうかなっ、と、思っている、まさにそのタイミングでFacebookのcocoroom採用説明会のイベントが目飛び込んできて何の躊躇も疑問もなく、ごく自然に足がむいたのもこんな感じだった。特に今までの仕事上のスキルや人間関係を活かすわけでもなく、逆に今までの仕事とは全く関連や接点がない仕事に自然に足がむいたのは、まさに「チビ火」的に瞬間的に頭の中に浮かんだイメージとリンクした。何故か？は分からない。

今、この「チビ火」を、周りに沢山いる「日替わりヤングばいせん師匠」たちの教えを受けながら、守・破・離の“守”から始め「中火」への<みっちゃんこんぷりーと>を目指す・・・

みっちゃん

昨年12月末に、40数年間務めた家具屋を定年退職して、今年1月末に晴れて失業認定された道上です。2月にゲンさんから「みっちゃん」と言う素敵なニックネームを頂戴しました。よろしく願いいたします。

火のこども

わたしがこどもの頃、つまり1970年代の奈良・吉野の集落では1月半ば頃に「どんど」が行われていた。近所のふだん駐車場になったりする空き地めいたところに、夕方にはしっかりした木が数本高く組まれている。暗くなると火がつけられ、家々からしめ縄やかきぞめ、おれなどが持ち込まれ投げ込まれる。細長く切った竹の先につきさされたお餅が焼けると、誰彼となく「さあ食べや」と渡してくれる。あああおとした竹。誰かが竹を切り、割いて先を尖らせてくれた。地域の誰かが、こうした準備をしていたことを、幼かったわたしはほとんど考えたことがなかった。

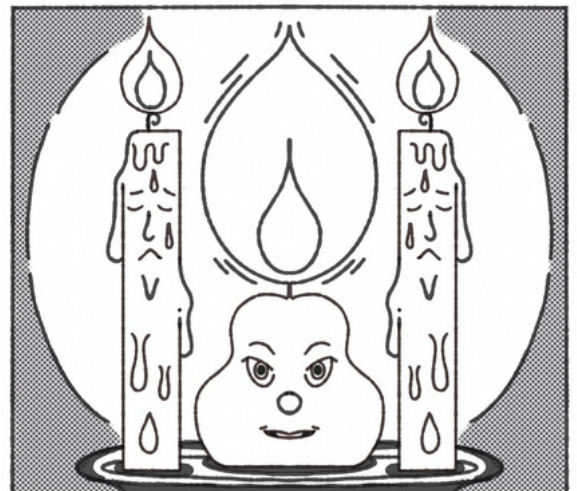
人々の話し声にまぎれて火の粉が暗闇に舞い上がり、時折はげしくパチパチとはぜる音がする。近所のおばちゃんやおっちゃんたち、暗闇のなかの火の色でときおり表情がみえる。ふだん見ている感じとすこしちがって色っぽいのは、暗さと火がどんどん入れ替わるからか、煙のにおいか、お酒を飲んでいたのかもかもしれない。

そして、その年に厄年にあたる人からお酒や食べ物がふるまわれる。なにかと物入りになりそうなのに、ここでお金をつかう。厄を落とすために。それを過ぎた人たちからは誰もが通る道やで、と励まされているような。ふるまったことで「ありがとう」と言われ、本人はその言葉にほっとするのかもしれない。厄年ってなに？こどもにはわからない大人の世界のようにも思え、おそれのような憧れのような。これまで以上の責任を引き受けなくてはならない年齢の扉の前で。

そして、その「どんど」のいこった（炭が赤くなった状態）炭を、小鍋のようなもの（十能というようだけど、家では「かんてき」と呼んだ気もするけど、呼び名が思い出せない）に、いれて家に持って帰って翌日、小豆の入ったおかいさん（おかゆのこと）を炊く。それを食べたら今年いちねん元気にすごせるとおばあちゃんは言う。大きな火から、ちいさな火をもらって。火のこども、をからだのなかにいれて、さあ。

上田假奈代（詩人）

こうした地域の催しの準備に関わったことはほぼない。吉野では餅まきを「ごくまき」といい、よく拾いにいったけれど、そういえば準備の餅つきに加わったことはない。誰かが準備してくれていたんやな、と今とても感謝している。現在はそうした地域の集まりが減ったことに気づく。だから今の時代にあったやり方で協働の経験を持ちたい。毎年、釜芸（ココルーム）で餅つき大会をするのもそんな気持ち。



釜ヶ崎芸術大学／ココルーム と いっしょに働く人、募集！！！！

西成区通称釜ヶ崎で活動するアートNPOココルームは
これからのおもしろい運営のために、いっしょに働く
人を数名求めています。

おもな業務

- ・喫茶店のフリ
- ・ゲストハウスの運営
- ・釜ヶ崎芸術大学の口座の運営



お問い合わせは、メール (info@cocoroom.org) まで
お願いします。

求人募集説明会のアーカイブ動画もありますので、ご
覧になりたい方は連絡をお願いします。

釜芸古本市開催中！

ココルームのなかに古本市ができました。
取り扱っている書籍は哲学、宗教、芸術、文学、人類学、ジェンダー論
など。商品は随時更新していきます。1冊100円～。
立ち読みOK。せっかくならドリンクを注文していただいて、
飲みながら読むこともできますよ。

NPO法人 こえとことばとこころの部屋（ココルーム）

Cocoroom: A non-profit organization.

The Room for Voices, Words, and Hearts

カフェ・バザー 10:00～19:00

宿泊チェックイン 15:00～20:00

〒557-0002 大阪市西成区太子2-3-3

2-3-3 Taishi, Nishinari-ku, Osaka, Japan 557-0002

電話：06-6636-1612

お問い合わせ：info@cocoroom.org

宿泊予約：room@cocoroom.org

<https://cocoroom.org/stay/>

【アクセス】

- 地下鉄御堂筋線「動物園前駅」2番出口から

動物園前商店街を南へ徒歩約5分

- 堺筋線「動物園前駅」8番もしくは9番出口から東へ、

動物園前商店街を南へ約3～5分

- JR新今宮駅から徒歩約8分

- 関西国際空港から「新今宮駅」まで

○南海電車 直通急行42分

○JR新今宮駅 急行56分

○南海電車 特急ラビート36分

- From Exit 2 of Dobutsuen-mae Station on the Midosuji Line:
5-minute walk South in the Dobutsuen-mae Shopping Street.

- From Exit 8 or 9 of Dobutsuen-mae Station on the Sakaisuji Line:
Walk East until entering the Dobutsuen-mae Shopping Street,
then walk South. Total 5 minutes.

- From Shin-Imamiya Station on the JR Line:
Walk East to the Dobutsuen-mae Shopping Street, then walk South
down the Shopping Street. Total 8 minutes.

- From Kansai International Airport to Shin-Imamiya Station:

● Nankai Electric Railway (Direct Express): 42 minutes

● JR Shin-Imamiya Station (Express): 56 minutes

● Nankai Electric Railway (Limited Express Rapi:t): 36 minutes



釜ヶ崎芸術大学サポートチーム

〈かまぶ〜〉メンバー大募集！

釜芸の運営を担当するかまぶ〜(釜ヶ崎芸術大学アートマネジメントプロ
フェッショナル)を随時募集しています。

かまぶ〜が行うことは、企画の準備や広報、当日の受付、進行や講師の
サポート、講座の記録やSNS発信など。

「場」を作ること、それをあらゆる人へ開くこと、あるいはアートマネ
ジメントなどにご興味がある方、ぜひ釜芸に何度か参加して雰囲気を知
ってみてください。

かまぶ〜希望の方は、メールなどでお気軽にご連絡ください。



本間にブックカフェ
Honmani Living Book Cafe

ココルームの1階にあるブックカフェ、本間にブックカフェ。
一日店長の老野生さんは、月・水・金曜日の午後1時から4時
のあいだ、店長をしています。おしゃべりしに来てください。
また誰でも店長になれます。

飲み物 500円～。軽食・アルコール類も有り。

ココルーム、釜ヶ崎芸術大学の 活動継続のための寄付をお願いします！

- ・三井住友銀行 天王寺駅前支店 普通 1585265
- ・りそな銀行 萩之茶屋支店 普通 0200091
- 名義：特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋
- ・郵便振替
- 記号 01090-5-48059 名義：ココルーム

- ・クレジットカードによる
寄付は「Syncable」で！

- ・住民税が控除となる
「なにわの芸術応援募金」
(ココルームをご指定ください)



【編集後記、と言う名のこの場をお借りして】

感謝したい。

あなた達は私に薪をくべてくれた。

あなた達は私に風を吹いてくれた。

はぜる火の粉を振り払わないでいてくれたことに只、感謝したい。

あなたの抜けた朗らかさに。

あなたの真面目な優しさに。

あなたの生きる美しさに。

あなたのぶっくらぼうなおおらかさに。

あなたのまっすぐな熱と聡明さに。

ココで言葉を介したあなた達に。

無鉄砲で、愚かな私と共に、ココに居たことを。

私にとっての初めての社会がココであった事を。

初めての先輩があなた達であった事を。

ありがとうございました。

新たな門出を祝して。

トオキ

元さん、風倫さん、きょうかさん、デイビット。長い間お疲れさまでした。
4月より、新体制となりますが、次年度もよろしくお願いいたします！